



阪神・淡路大震災25年 シンポジウム

-身近な災害への対応と心のケアの普遍化をはかるために-



諏訪清二さん

兵教組は阪神・淡路大震災の教訓に学ぶ教育創造のとりくみをすすめてきた。とりわけ、被災地の子どもたちに対する教職員による心のケアのとりくみは、全般的にも例をみない実践として評価を受けている。

また、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーの配置促進については、不十分ながらもすすんできている。一方で、いじめや虐待などが社会問題となり、心のケアは日常的に必要となつていて、震災の経験と教訓を「語り継ぎ」、「風化させない」とりくみを展開し、防災・減災教育をひろく発信していく必要がある。

阪神・淡路大震災、神戸連続殺傷事件をうけて、心の教育総合センターが立ち上がり、ストレスマネジメントや暴力防止など様々な教材を発信してきた。しかし、学校現場では活用されていない。これは、心の健康教育が日本の学習指導要領に、十分な時間、位置づけられていないからである。

災害時、幼児だった子どもが小学生になると、強いトラウマ反応を示す場合がある。地震の恐怖、津波の恐怖など安全と危険を区別できなくなるのがトラウマである。引き続いて親が離



富永良喜さん

1月18日、ラツセホールで「阪神・淡路大震災25年シンポジウム」を開催し、約100人が参加した。中森慶さん（防災教育部会研究員）による、防災教育部会が毎年とりくんでいる「東日本大震災にかかる避難児童生徒に対する支援状況調査」報告があつた。その後、諷訪清二さん（防災教育部会協力研究所員）をコーディネーターに、伊藤進二さん（防災教育部会協力研究所員）、富永良喜さん（防災教育部会協力研究所員）、玉元陽大さん（白鷺小中学校教員）がパネリストとして登壇し、活発な討議がおこなわれた。



伊藤進二さん

婚する、アルコール依存になる、このような大人のストレスが子どもにそのままはね返つてくる。そのことが原因で、何年間も個別に配慮をする子どもの数が減少しなかつた。心のケアだけでなく経済の復興の仕組みをサポートすることが大切である。

東日本大震災の時、岩手のある小学校はあと5分逃げ遅れたら148人の命が危ぶまれた。校務員の方が何度も海面を見て、「大津波が来る。笑われてもいいから山に行きましょう」と進言し、助かつた。校務員の方は、津波が来なかつたら村八分でもうこの町に住めないという思いで、「笑わてもいいから」と進言したそうだ。現在、この話を紙芝居にし、語り継ごうとしている。潮が引かなく

子どもたちは、災害力で傷ついている。子たちのために、「心の健

ある。災害時、人は逃い心理があること、家命が奪われるとストレ

害のリスクが非常に高

るため、減災に力を入

ことなどを子どもたち

え、災害が起きたら、

で展開する、教職員・

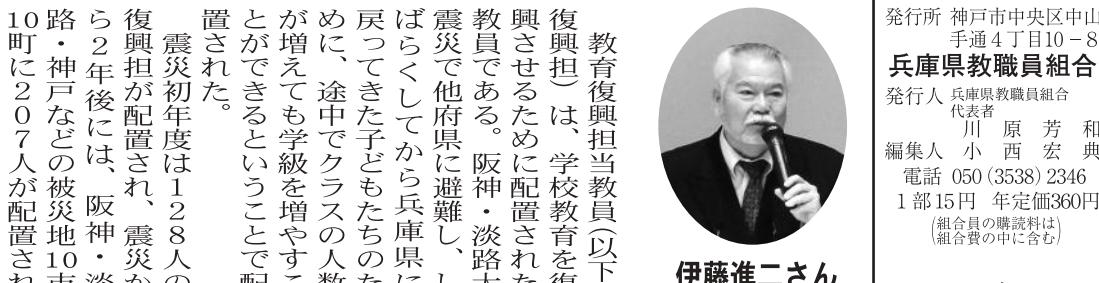
ンセラーの共同システ

つくるなどの仕組みを

るべきである。心の健

充実させるためにも子

たちが学ぶ時間を用意



伊藤進二さん

た。心のケアを必要とする子どもたちは震災初年度よりも2年目の方が増加しました。子どもたちの心のケアをおこなうために、復興担には年に2回研修がおこなわれ、様々な心のケアの症例と対処方法を学んだ。「復興担」という存在が子どもたちに安心感を与える要素になつたのではないかと言われている。担任ではない、学年の先生でもない、管理職でもない、でも横にいてくれる先生。側で見てくれる先生が一人増えたことで、復興担の存在自体が子どもたちの心のケアになつていたのである。

校務分掌は、ほとんどが防災教育と児童・生徒の安全・安全、心のケアであり、

「防災教育」はいのちの教育として子どもたちの未来を守る教育になつてき

た。子どもたちとできるだけ関わることをメインにしてもうらつた。クラスの中に居場所がなく、みんなと一緒に授業を受けることのできない子どもに寄り添い、教室の外を散歩したり、アリをじつと見ていたりして、体み時間などでみんなが外に出ているときには教室に入る。みんなが帰つてくるとまた外へ出て過ごすこともあつた。このように子どもたちと接している207人の中の復興担の仲間たちが、それぞれ横のつながりをもつて子どもたちと関わってきた。

No.1993
2面

・ 第69次教育研究全国集会



玉元陽大さん

・佐用では09年に大きな水害があり、日常的に学活の時間を使って、「伝える」実践を重ねている。今回改めて日常的に心のケアをしていくことが大事であると感じた。本日学んだことを実践していきたい。

・日常からの心の健康は必要だが、それを被災経験のない地域でリアルに感じながら、プログラム化、カリキュラム化していく、どのように教職員に話していく

姫路市は未災地であり、その未災地の子どもたちにとつて、防災は遠い存在である。ただ単に地震のこと調べてまとめて発表するということで終わってしまふと、他人事・よそ事で終

災力は、自助力、共助力を主に高めていきたいという思いをこめ、私たちにしかできないことをおこないたいと考えた。しかし、防災力を高めるだけでなく、総合としての資質能力を高めていくことが大切である。防災教育を通して、探究的に必要な知識・技能等を身

災害は社会生活に直結している。災害が起つた時にどう行動していいのか正解はない。その部分を考えていく点において、「総合や「探究的な学習」と防災の相性はいいと思う。そこで小学4年生に「高めよう白鷺の防災力」の単元名のもと、実践を計画した。防

14年に丹波市の豪雨で被災した学校に勤務していました。その時、自分の生活地域がこのようになることになったことは思つてもいなかつた。被災しないとわからないこともたくさんある。どの上に子どもと接しているのが学んできたはずだが、寄り添い方は一人ひとり違ひ、その都度寄り添う必要があることを改めて痛感した。今日のようなことを語り継いでいきたい。

最初の問い合わせ次の質問を生む。Q&AではなくQ&Qになることが探究につながっていく。教員が与える問い合わせもあるが、子どもたち自身で身近な問い合わせを見つけていく課題を解決していく過程で、子どもたちも成長させていくことが大事である。

地震体験をし、体育館で避難所をつくり、実際に生活もおこなった。このように身体を通して感じることが大事だと考えている。また防災学習の目的に迫ることも大事である。子どもたちも自身で司会をし、討議をしてながら南海トラフ地震についても考えた。

自分事にするために、三
不市の広域防災センターで
様々なテーマがあり、学校
の場所、環境によっても陸
火と子どもたちとの距離が
異なる。防災を自分事として
捉えていくためには、教員
自身のあらゆる手立てが必要
である。教員が手立てをして
していくことによって、自
然災害に対する切実感や
火をしないといけない気持
りを持つて本気でとりくむ
子どもになってほしいとい
うのが私たちの願いであ
る。

